



クレマチス

102 編は詠み人知らずですが、端書きに 祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩 とあります。

心挫けて とか 貧しい人 という言葉から、詩人の弱さに親近感を抱かせられますが、そのような状況でも、詩人は 主の御前に思いを注ぎ出 して、真剣に祈りを捧げていますので、これは重大な事態、おそらく国の崩壊、捕囚の民となった時の詩であろうと想像します。

この詩は、詩の形式が変わっています。ある詩に別の詩が挿入されたように見受けられます。別の詩とは段落を下げて挿入されている部分です。もとの詩は堂々たる神への賛歌です。礼拝の度に、全員で捧げる賛歌でしょう。三つの部分に分けられています。①神は祈りを聞かれる ②神はとこしえにシオンを憐れまれる ③神は民をシオンに集められる、という流れになっています。

一方、①の次に挿入される詩は悲嘆、悲哀としか言いようがありません。死を前に、衰え、孤独の苦しみの中にあることを訴えています。

わたしの生涯は煙となって消え去る。骨は炉のように焼ける。

打ちひしがれた心は、草のように乾く。わたしはパンを食べることすら忘れた。

わたしは呻き／骨は肉にすがりつき／荒れ野のみみずく／廃虚のふくろうのようになった。

屋根の上にひとりいる鳥のように／わたしは目覚めている。／敵は絶えることなくわたしを辱め

嘲る者はわたしによって誓う。／わたしはパンに代えて灰を食べ／飲み物には涙を混ぜた。(4-10)

もとの詩②で、神の憐れみを賛美した後、詩人は 主はすべてを喪失した者の祈りを顧み／その祈りを侮られませんでした。(18) と、我に返ったように、信仰を告白し、父から子へと語り伝えるべき信仰を思い起こし、若い世代のために自分に出来ることとして証しを記します。後の世代のために／このことは書き記されねばならない。「主を賛美するために民は創造された。」(19)

心挫けて いた詩人は、もとの詩③で、神の業を褒めたたえた後は、奴隷の身から解放され、捕囚の身から帰還が許されたことを思い出し、神の救いの計らいを思って、自らの歌を歌います。

わたしの力が道半ばで衰え／生涯が短くされようとしたとき／わたしは言った。

「わたしの神よ、生涯の半ばで／わたしを取り去らないでください。あなたの歳月は代々に続くのです。かつてあなたは大地の基を据え／御手をもって天を造られました。／それらが滅びることはあるでしょう。しかし、あなたは永らえられます。すべては衣のように朽ち果てます。…

しかし、あなたが変わることはありません。あなたの歳月は終ることがありません。」(24-28)

詩人は天地が滅びても、神は永遠であるという信仰にかけて、あなたの僕らの末は住むところを得／子孫は御前に固く立てられるでしょう。(29) と信頼を寄せています。

『讚美歌 21』は 19 節に関連付けて 19「み栄告げる歌は」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-06-24> をあげています。ジュネーブ詩編歌は少し憂いを帯びたようなビオラ・ダ・ガンバの重奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=Unzd-M7sz8U&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=102>